

イケメンとテンネン

S a k i & A s a b i

流月るる

Ruru Ruzuki



エタニティ文庫

目次

イケメンとテンネン

5

書き下ろし番外編 流サレテ溺レル

335

イケメンとテレンネン

第一章 「キラライ」から始まる「スキ」

私のキラライなもの。
イケメンとテンネン。

鏡の前で、髪をくるりと綺麗に巻く。メイクは薄すぎず濃すぎず、マスカラはポリユームより長さを強調。爪はネイルがはがれていないか確認して、全体の服のバランスをチエックする。

「うん、大丈夫」

にっこりと笑って、最後の仕上げに艶やかなグロスを塗り、私、牧野咲希は武装する。華やかで強くて綺麗なオンナに。

好きな男ができれば、かわいくなりたい、綺麗になりたい、仕事もしつかりできるアイコンナになりたい。そう願うものだと思う。

努力するのは見た目だけじゃない、中身もだ。新聞に目を通して社会で今何が起きて

いるかを知る。英会話教室に通う時間はなくても、英語が学べるアプリをダウンロードして勉強したり、銀行の女性向けセミナーで金融商品を開きかじったりする。

大手商社の総務部に勤める身としては、それらはキャリアアップにもつながるのだ。好きな人に少しでもふさわしくあるために、自分を磨く努力をする。

でも世の中には、自分は何をしても地味だからと最初から諦めて、ありのままの自分でいようとする子もいる。そんな女の子に限って、「自分なんか」と卑下して、恋をしようとかイケイ男を掴まえようとかいう努力もせずに、「いつか王子様が」なんて夢見ていたりするのだ。

けれど……男に愛されるのは、意外にそういうタイプだったりする。

「ほら、桜井さんと一緒にいるの……」

「地味な子だよ、釣り合っていないじゃない」

女子社員のひそひそ声と彼女たちの視線が向かう方をちらりと見た。明るい栗色の地毛に、涼しげな目元、優しげで品のある王子様系の顔立ち。まるで韓流ドラマに出てくる御曹司役の俳優みたいな男。それが桜井透だ。

現在、経営企画部にいる彼は、その見た目だけでなく仕事ぶりも評価されている。保守的な上司をうまくコントロールして、革新的な企画を提案し成功に導いている我が社のホープの一人だ。

彼とは高校三年から、大学、就職先まで同じで、男友達としてずっと仲よくしている。そんな彼の微笑みを隣で受け止めているのは女子社員の言う通り、地味な女だった。グレーというよりもねずみ色といった方がいいスーツに、面白みのない白いシャツ。袖の長さや身ごろのラインを見ても、体に合っていないのがよくわかる。肩ではねている髪は整えられた気配もない。ノーメイクに近い薄化粧でいかにも「原石です」みたいな風情のテンネン女、それが透の彼女である夏井莉緒だ。

入社二年目なら初々しさが多少抜けかかってもおかしくないのに、いつまでたっても垢抜けない。

けれど少し高くてやわらかな声とか屈託ない笑顔とか、毒々しい女の部分を見せない（もしくは、ない）ことで、無自覚にスベックの高い男を引き寄せる。

某アイドルグループのコンセプト……普通っぽさがウリ、みたいなのを体現しているのが彼女だ。

二人が一緒にいる姿を見ると、私の胸中には灰色のややもやが広がってくる。透の隣はずっと私の場所だった。

透の傍にいてもおかしくないように爪の形を綺麗に整え、髪も枝毛が出ないように手入れをし、自分に似合うメイクを勉強した。洋服のセンスを磨き、彼の豊富な話題についていくために、最新の情報を収集することも怠らなかつた。

彼の傍にいて、嫉妬もされたし陰口も言われたし、軽いいじめみたいなものにも遭ったけれど、それにも耐えた。

いつかは……いつかは友達を越えて特別な関係になれるんじゃないかって、期待していたから。

でも透が選んだのは、彼の傍にいたために努力してきた私じゃなく、「ありのまま」の彼女だ。

「牧野さんの方がよっぽどお似合いなのに」
「夏井さんよりは確かにねー」

自分の名前が出たのをきっかけに、こっそりその場を離れる。だって嫌味にしか聞こえないんだもん。どんなに第三者に「お似合い」だって言われたって、透が選んだのはあの子なんだから。

私は他部署から引きあげてきた書類を抱え、お昼休憩に向かう社員の波に逆らって歩いた。

「あなたみたいな子が、桜井さんの傍にいと目ざわりなのよ！」

廊下の端にある女子トイレから聞こえてきた声に、私は自分のタイミングの悪さを呪う。

ああ、やつぱり。またこんなことになるんじゃないかと思っていたんだよね。透とテンネンちゃんのツーショット姿が目撃談が最近増えてきたから。

私はふうつと息を吐いて足を止める。あの子に関わるとロクなことないから、いっそ聞かなかったことにしよう。あの子も散々こんな目に遭ってきているんだから少しは学習して、こんな人気のないトイレを使うの避ければいいのに。

けれど、踵を返そうとした瞬間「きゃー、あんた何すんのよ！」という叫び声が聞こえて、私は思わずトイレに駆け込んでしまった。

そこには、涙目になりながらも水道から水を飛ばしているテンネンちゃんと、文句を言っていた美女がびしょぬれで立ち尽くしていた。

口では敵わないから実力行使に出たのだろう。これまでは泣き寝入りしてばかりだったけど、世間にもまれて少しは成長してきたようだ。

「私は！ 桜井さん、本人に、迷惑だつて言われないう限り、傍にいます！」

声を震わせながらもテンネンちゃんは言い放つ。この間までは何も言い返せずに落ち込んでいたのに、透の気持ちがちんとわかったから自信がついたのかもしれない。

「牧野さん！ この子ひどいのよ！ いきなり私に水をかけてきたの！」

いや、私に言われても困るんだけど。

美女を見れば巻き髪は濡れたせいで崩れ、綺麗に施されてあった化粧は……いいも

のを使っているんだろう、特に歪みはない。ジャケットの下の白いブラウスからは、赤い色が透けて見えている。うわ、会社に赤いブラジャーつけてくるんだ、この人。まあ、立派な谷間をお持ちですからね。

「夏井さん……さすがにやりすぎ。やりかえした根性は認めるけど」

「牧野さん」

一方、こつちはほとんどすっぱいかと思っただけで化粧が余計に幼く見えるし、あいかわらず服装も地味だ。

「あなたも課長には伝えておくから、更衣室で着替えてきたら。その格好じゃ男を喜ばせるだけだし」

びしょ濡れの美女にそう声をかけると、彼女は私の言葉に悔しそうに唇を噛んだ。

「牧野さんは、悔しくないの!？」

テンネンちゃんを睨みながら彼女は問いかける。そのあとに続く言葉は「こんな女に透をとられて」だろうか。

そうは言ってもね、私は「悔しい」なんて思っていない関係じゃないんだよ、透とは。いろんな噂を放置しているから、誤解している人が多いことは知っているけど。一応私にもお付き合いしている彼がいるしね。

「桜井さん、本当に見る目ない!!」

言い捨てた美女の後ろ姿を見送る。見る目がないのかあるのか私にはわからない。わかるのは、透が選んだ相手が彼女だったことだけ。

テンネンちゃんの紺色のジャケットの下は、やっぱりシンプルな白いシャツ。透けているベージュのブラジャーを見て、私はため息をついた。自分からしかけておいて濡れちゃ、意味ないじゃんね。

「ほら、あなたも着替えてきたら。っていうか着替えぐらい置いてあるわよね？」

かすかに濡れた髪先が左右に揺れる。そうか、勤務後に急に約束ができて着替えた方がいい場面もあるかも、なんて想像しないよねえ。仕方ないから私の替えを貸すしかない。この格好で仕事に戻ったら、透が心配するだろう。

「牧野、ちょうどよかった」

女子更衣室に行く途中、廊下の向こうから声がかかる。またどうしてこんなタイミングで来るかなあ。今呂朝陽はすぐに私の後ろにいる存在に気づいて、そして顔をしかめる。

「……誰にやられた？」

いつも以上に低い声にこもる憤り。クールな雰囲気醸し出している男がすぐむと、迫力がある。

営業一課に所属する同期のこの男もまた、透と並ぶ我が社のホープ。熱意があるようには見えないのに、気難しい取引先には信頼され、思ってもみない切り口で新規を開拓

してきたりする。

透が王子なら、こいつはさしずめなんだろう……魔王？

冷たそうな目にクールな態度。透とは対照的な男だが、この手のタイプが好みの女たちにはたまらないイケメンだ。

あまり感情を露わにしないで、こういうときだけ感情が表れるあたり、こいつにとつてもテンネンちゃんは特別なんだなと思う。

「やられたんじゃないわよ。自業自得。自分で濡らしたの」

「夏井さんが……？ これ、牧野にやられたんじゃないのか？」

どうしてそうなるおまえ。

あなたが私のことを気に入らないのも知っているし、私がテンネンちゃんを嫌いなのも事実だけ。

「違います！ 牧野さんは助けてくれたんです」

助けたわけじゃない。通りかかっただけだ。

「というわけでこの子に着替え貸さなきゃなんないから急ぐんだけど、私に何か用？」

「あとでいい。夕方また声をかけるよ」

ふん、急ぎじゃないならいいけどさ。

「災難、だったな」

そう言って、テンネンちゃんの頭を軽く撫でて通り過ぎていく。

こんなの透が見たら激しく嫉妬する。それにあなたに憧れている女たちのやつかみにまた遭うぞ。そういうのわかってやってているのか、そうじゃないのかわからないけれど。まあ、いい男にモテてしまう女の宿命かもね。

女子更衣室に入り、私はテンネンちゃんに着替えを渡した。ついでに全体をコーディネートしてあげる。

テンネンちゃんの顔立ちは一見本当に普通。胸の大きさもスタイルもごくごく平均的。だからちゃんと自分にあつたサイズのものや、ラインに注意して、服を選べばなんとかなる。こうしてふんわりフリルをあしらった淡いピンク色のシャツを着せてジャケットのボタンを外して。目元を中心にしたメイクをして唇の色は控えめに。毛先が濡れた髪はちよつとアレンジして、高めの位置で結んでシュッシュで華やかさを出せば――

ああ、悔しいけれど。

肌は白くて綺麗だし、二重もはっきりしているから、アイラインを入れるだけで目が大きく見える。ちよつと華やかにするだけで、かわいらしく変身した。そしてその姿を見た彼女は素直に喜んでくれる。

この子は感情表現が素直だ。

そういう部分に、透や今宮みたいなハイスペックな男は惹かれる。

普段、自分に自信があつて、色気をふりまいて駆け引きしてくる女に囲まれているから、余計に。

「牧野さん……魔法使いみたいです」

「あなたはもう少し自分を飾る勉強をなさい。そうすれば、透と不似合いだなんて言われなくてすむのよ。元は悪くないんだから」

「似合っていないんじゃないかって、不安で。それに、お化粧すると派手になりすぎるから」

だろうね、わかるよ。でも、それは勉強と努力が足りないからだよ。まあ、何もしなくても男たちは彼女に群がっていくんだけど。

ん？ こんなことをしたらもつと男の目を引きつけてしまつて、透が心配するかも。ま、いいや。彼が困ろうと困るまいと私には関係ないし。

腕時計を見ると、あと数分で休憩が終わる時間だった。

「仕事に戻るわよ」

「はい！」

扉を開けると、女子更衣室の前にいるべきでない人物が壁によりかかっていた。

相変わらず過保護なこと。彼が――透がここにいるってことは、今宮が透に知らせたってことだ。二人とも過保護ってこと？

「莉緒、大丈夫？」

透は壁から体を起こし、すぐに彼女の肩をやりわりと抱く。透くん、私の目を気にしてくださいね。

「朝陽から聞いて。どこか痛いところとかない？」

「子どもじゃないんだから大丈夫よ。この子は加害者」

「だ、大丈夫です」

「……っていうか、これ、咲希ちゃんがやったの？」

「ブラウス貸してあげたから、ついでにいじらせてもらっただけよ」

透はテンネンちゃんにはわからないよう、私にこっそり迷惑そうな顔を見せて、曖昧な笑みを浮かべる。

「に、あわない、ですか？」

テンネンちゃんは潤んだ瞳で上目づかいをして、おそろおそろ尋ねている。なかなか高度な技術を無意識でやるあたり、本当にこの子侮れない。

「ううん。似合っている。かわいい。かわいすぎて仕事に戻したくないくらいだ」

透の菌の浮くような台詞に彼女が頬を染める。そんな台詞をサラツと言ってしまう透も、ほんと無敵です。

「じゃあ私は仕事に戻るから。夏井さん、そのブラウス、クリーニングして返してね。透、あとはよろしく」

テンネンちゃんは好きじゃない。本当に天然なんだってわかった今でも、この子のことは好きにはなれない。たぶんそれは私のやつかみが大半を占めているけれど。それでも透が幸せそうに笑うから。だからいいんだって思うようにしている。

透が幸せならそれでいい。

透の愛しい眼差しが私に向けられることはなくても。

放っておけない空気感を素面^{しらふ}で出しまくるテンネンちゃんに、透はすぐに手を差し伸べた。

女嫌いとまではいかなかったも、適度に距離をとっていた彼が自ら動いたのだ。

控えめなタイプの子の女の子はあまり透の近くに寄ってこないの、彼は自分の好み^{みずか}が彼女みたいな女の子であると気づくの^{ひか}に時間がかかったようだ。

私は透の好みに気づいていたけれど、あえてそういう子は近づけないようにしていた。そう、私は邪魔をしていたのだ。

私が傍にいるから近づけないっていうような子に透を渡したくなかった。本当に彼のことを好きならば、奪いにきなさいよって感じた。

けれど私が予防線を張る間もなく二人は出会って、想いを通じ合わせるようになった。そりゃ、そうだよ。あの見た目だし、素で王子様をやる男だよ。どんな女だってそんな男に好かれれば、ころっとよろめくよ、ころっと。

けれど私は警戒した。

テンネンちゃんは、本当に天然なのか。

裏があるんじゃないか。他にも男がいるんじゃないか。

だから彼女が透のファンに囲まれていても放置したし、自信をなくすよう仕向けたりもした。

だけど、今はもう……あの子が本当に「イイ子」だってことも、透を本気で好きなのとも一応認めてやっている。

「なあ、営業三課の夏井さん見た？　なんか、ちょっとかわいい感じだったんだけど」
おお、おお。

男たちの噂になってきているみたいだ。私の腕がいいからだけど、やっぱり手を加えるだけで、注目浴びちゃうんだ、あの子は。

この会社にはテンネンちゃんより、綺麗な子もかわいい子もたくさんいる。

特に秘書課なんかはレベルが高くて、合コンの誘いが途絶えならしい。その子たちももちろん注目はされているけれど、高嶺の花っぽくって鑑賞用で終わっている。まあ、

秘書課の方々は彼氏持ち率高いけどね。

そんな中にあってもテンネンちゃんは注目を浴びるのだから、やはり男から見ればどこかに魅力があるんだろう。

「牧野、今、手あいているか？」

フロア内がざわついたと思ったら、またこいつの登場か。

「あいてないけど、なんででしょう？」

そういうえば、こいつ夕方また来るって言っていたな。すっかり忘れていたよ。私の言葉に、今宮はすつと目を細めて嫌そうな表情をした。

社員研修で出会って以来、こいつとは顔を合わせる機会が多い。なぜなら透がこの男と仲良くしているからだ。

そのせいかどうか知らないが、こいつはなぜか自分の仕事のサポートに私を使いたがる。

初めて会ったときから私はこの男が嫌いだ。だってどっからどう見たって、イケメン。そしてそれをきちんと自覚していて、余計な女が寄ってこないように事前にバリアを張る傲慢な態度も気に入らない。

あなたの仕事をサポートしたい女なら、そのへんにうじゃうじゃいるじゃん。あんたからの頼みだったら、快く引き受けてくれるよ。

と、目だけで訴えてみる。

今宮は私の視線をスルーして、書類をどきっと机に置いた。

「この部分、過去のデータが欲しい。それからこの数字再度チェックして」

「いつまでに？」

「明日の午前中」

「私、他にも頼まれている仕事があるんですが」

「牧野なら大丈夫だ」

その根拠はどこにある。だいたいなんで私がおまえの仕事を手伝わなきゃなんない。

「あのー、よかつたらそれ、私がやりましょうか」

おお、天の声、と振り返ればつい先日いらしたばかりのかわいい派遣さん。万人受けしそうな服装に派手じゃない化粧。性格はよく知らないけど悪くなさそう。今宮をロックオンして目をキラキラさせているけど、女としてそれは当然の反応だから良しとしよう。

「いや、これは彼女にしかできないから」

こういうタイプもだめ？ やっぱりあんたの好きなタイプもテンネンちゃん？

派遣さんは今宮の冷たい口調にびくっとして、失礼しましたと頭を下げて去ってし

まった。こいつの迷惑そうな態度に気づくだけ、なかなかいい子だと思っただけ。

派遣さんを見送ると、フロア内の社員の視線が集まっていることに気づく。私たちのやり取りをいーんな迷惑で見ているんだろう。

やってられない！

「わかりました。明日のお昼までにやっておきます」

これ以上変な注目を浴びるのも嫌だったので、私はしぶしぶ引き受ける。いつも抵抗しているのに、どうして私に頼むんだろう。

わかっているけどね。

仕事ができるから私に声をかけるわけじゃない。余計な女と親しくならないための予防線を張るために、私を利用してほだけだ。

「じゃあ、頼む」

ふっと目の前の机にオレンジジュースの紙パックが置かれた。思わずそれと今宮とを見比べるけど、奴は無表情のまま。

「それ、飲んでいい」

私は呆然として奴の背中を見送る。コーヒーでも紅茶でもなく、オレンジジュース。そのセレクトに意味があるのかないのかわからないけれど、私は今宮のこういうさりげなさが嫌いだ。誰にも関心がないようにふるまっているくせに、ふいに示してくる気遣

いみちなもの。

机の上の書類とオレンジジュースを見て、私はため息をついた。

* * *

「今宮、午後からの打ち合わせに必要なデータ、間に合いそう?」

主任の言葉に、プレゼン用の資料をファイルに保存しながらオレは時計を見た。総務の牧野咲希に頼んだ資料は、打ち合わせに必須のものじゃない。ただ先方に問われたときにはすぐ提示できるように準備しておきたい補助資料だ。

「大丈夫だと思います」

今日のお昼までと頼んだときに、牧野は異を唱えたりはしなかった。間に合いそうにないと判断すればその場で言うはずだ。それがなかったということは、きちんと仕上げてくるつもりなのだろう。

「誰に頼んだの?」

先輩社員にこそこそと耳打ちされ、「牧野です」と答えると、彼は驚いたように目を丸くする。「よく引き受けてくれたね、急だったし量もあったのに」と続けられてオレは苦笑した。

仕事はできるけれど厳しい、と敬遠する輩も多いが、仕事は確実だし、そこに余計な私情を挟まないのが、オレは彼女を評価していた。実際、営業三課の連中はどんなに文句を言われても、牧野に仕事を頼むことが多いらしい。

「今宮くん」

高めのかわいらしい声が響いて、ドアの向こうから牧野が顔を出す。くるりとした毛先が胸元を覆い、綺麗なピンク色に塗られた指先が大事そうに書類を抱えている。紺色のふわりと広がったスカートに袖口にレースがついたブラウス。外見は甘めかわいらしいのに、その表情だけがきつい。

見た目が派手で気が強い彼女は、本来ならオレが苦手とするタイプだ。

男が好みそうな女を演出し、わざと隙を見せることもできる、したたかな肉食系女子。自分に自信があるタイプの女と関わることに飽き飽きしていたオレは、最初彼女のことを警戒していた。だが、今は違う。

時計を見れば、予定時刻の十五分前。予定より早く仕上げてきたことに満足する。牧野は初対面のとくと同様、嫌そうな表情を隠さずにオレに書類を渡してきた。

「助かった。ありがとう」

「どういたしまして。一応確認してくれる?」

パラパラとページをめくって中身を確かめる。データの内容や日付など不備がないか

チェックしながら、ちらりと牧野を見た。ちょっと心配そうな上目づかいをしているのは、たぶん無意識なんだろう。オレ相手にそういうテクを使う女じゃない。

「大丈夫だ」

「そ、よかった」

すぐに頼りなげな空気を消して、得意げににっこり微笑む。

「あ、牧野さんだ」という他の男の声聞こえているかどうかわからないけれど、その笑顔は意図的に作ったように見えた。

「じゃあ」

「ああ」

去ろうとした牧野が、ふと立ち止まってオレを見上げる。曖昧な表情をして、牧野は小さく口を開いた。

「昨日は、ジューズ……ありがと」

そう言っただけ身を翻した牧野に、オレは呆気にとられる。その後、浮かびそうになった笑みを嘔み殺した。

一息ついてオレは時計を見た。仕事はあと少し残っているけれど、休憩でも入れようとエレベーターに向かう。

各階の喫煙ルームの傍には休憩スペースがある。けれどオレはあまりそこを利用せず、役員フロアの休憩室に行く。透に教えられたその場所は、一般社員はエレベーターでは直接行けず、下の階で降りて非常階段を使うという面倒な手段をとらなければならぬ。

だが、自販機も多いし、休憩用の椅子もいいものが設置されているうえに人が少ない。残業時間帯の今ならなおさらだ。

到着したエレベーターの扉が開くと、中には見知った顔が乗っていた。

「こんにちは。今宮さんも休憩ですか？」

一日の仕事の終わり、誰もが疲れを滲ませるはずなのに、夏井さんの笑顔にはそういういたものが微塵も見えない。

彼女は初対面のときからオレにぼーっと見とれることもなく、媚を売ることもなく、常にマイペースでここにこ笑いかけてくる。

「夏井さんも上？」

「はい！ 牧野さんにお借りしたブラウスがやっと戻ってきたので、今クリーニング屋さんから取ってきたんです！ 牧野さんと透さん、上で休憩中らしいので」

見れば、ビニールのかかった淡いピンク色のブラウスが紙袋の中に入っていた。ああ、これが透が不機嫌だった元凶か。「夏井さんの雰囲気違っていいかわい」とか、「あ

の子、あんなにかわいかったんだ」みたいな声がちらほら聞こえてきて、透は複雑そうだった。着替えを貸しただけじゃなく変身の手助けまで牧野がしたらしいと知って、正直オレは驚いていた。

どう見たって牧野は夏井さんを嫌っていたから。

化粧もあまりうまくないし、服装もおかしくはないけれど普通。仕事はできるともできないとも言えず、とりたてて目立つ要素がない。そんな夏井さんを、透が困い込みに走った。隙を与えながらも逃げられないように。

みんなのものであったはずの王子様の変化に、牧野も周囲も、すぐに気がついた。牧野相手では不発が多かったイジメは、夏井さんに命中する。それは女のやつかみ、妬み（ねたみ）がどれだけ他人を傷つけるか、よく知っていたオレでさえ驚くほどのものだった。透はできるだけ排除しようとしていたけれど、女の世界には男が入り込めない場所がいくつもある。女子トイレだとか、女子更衣室だとかだ。

牧野が、透の想い人である彼女をどうするのか興味はあった。他の女と一緒にあって邪魔をするのか手を差し伸べるのか。でも牧野は放置を決めた。

オレはちらりと夏井さんを見る。

透と付き合いはじめても相変わらず垢（あか）抜けなくて純朴（じゅんぱく）、けれど彼女のめげなさや元気よさやキラキラした裏のない笑顔は、綺麗なメイクや服装にも負けない武器だ。

嫌われているとわかっているけど、牧野を慕える強さも。

「荷物持とうか？」

エレベーターから降りて非常階段のドアを開けると、オレは声をかけた。夏井さんはびつくりしたような表情をしたあと、とんでもないと言わんばかりに顔を横にぶんぶんと振る。

「大丈夫ですよー、軽いですから。それにこっちは今宮さんに持っていたくにはかわいすぎます」

彼女はもうひとつカラフルな袋を持っていた。オレンジ色のリボンに小さな白い花が飾られている。

「牧野さんへのお礼です。牧野さんっぽくてかわいいでしょう。フルーツのキャンディの詰め合わせなんです。すごくかわいくてたくさん買っちゃいました。牧野さんに『かわいー』って言ってもらえたらいいんですけど」

牧野っぽいというのがよくわからなかったけれど、オレは曖昧（あいまい）に頷いた。透に会えるのが嬉しいのか牧野に会えるのが嬉しいのか、その両方みたいに夏井さんは階段を跳ねるようにかけ上（のぼ）っていく。扉を開けて廊下に出ると、彼女はその足をふっと止めた。

「夏井さん？ どうした？」

彼女が見ている方向にオレも視線を移す。薄暗い廊下の奥が、そこだけふんわり温か

な明かりに包まれ、丸い椅子が浮かび上がっていた。白いカップを手にした二人は椅子には座らずに、窓辺に立って何やら話をしている。

透は誰にでも見せる優しい眼差しの中に、どこか甘いものを漂わせて牧野を見ていた。あいつは誰にでも優しく穏やかに接するけれど、牧野にだけは振りではない表情をよく見せる。甘えたりすねたりしたような口調で話すのも、牧野にだけだ。

牧野も牧野で、普段の肩肘かたひじを張った表情じゃなく、「ふにやり」といった隙すきのある笑みを浮かべている。

こういう牧野はあまり見られない。透と二人でいても周囲に人がいるときには見せないからだ。

あの二人が恋人同士でないなんて信じられないくらいに、漂う空気は甘い。

恋人が自分以外の相手を愛しげに見ているなんて、夏井さんだってあまり気持ちよくないだろう。そう思って彼女を見ると、夏井さんはうっとりとした表情で二人を眺めていた。

「かわいい、かわいいです、牧野さん！ あんな牧野さん貴重ですよ。私にはなかなか見せてくれないですもん、今みたいな笑顔」

小声ここゑで力説する彼女にオレは脱力する。こんな場面で嫉妬しとをすることでどこか、牧野を見て悶えるなんてやっぱりの子は変わっている。

「今宮さん、もう少し二人を堪能たんのうしていいですか？ あんな優しくそうな透さんも、かわいい牧野さんもなかなか拜おがめないんです。私がいると絶対牧野さん、いつつもこーんなふうに眉が寄っているのですね」

眉が寄っているのは夏井さんに対してだけじゃない。オレにだってそうだけどな。「かわいい」ね。

夏井さんの言う通り、おそらく誰にも見せることのないやわらかな表情は、いつもよりあいつを幼く見せる。

悶えて妙な動きをしている夏井さんに牧野が気がついて、嫌そうに顔をしかめるまでのわずかな間、オレは二人を見つめていた。

透以外には決して見せないだろうそれに少しだけ興味を抱いたのは、きっとただの好奇心。

* * *

はい、私は今日高級レストランでフレンチのコースをいただくことになりました。十九時半にレストランのウェイティングバーに集合だ。

もちろんこれは透あきの奢り。

この間テンネンちゃんを庇い、さらにブラウスまで貸したお礼をしたということだったので、ここぞとばかりに要求してみました。いいんだ、幸せカップルには何したって!! かわいらしいキャンディの詰め合わせセットはテンネンちゃんにもらったけどね。

透とテンネンちゃんと三人というのがなんとも微妙だけれど、美味しい食事には代えられない。この際、目の前でいちゃつかれても気にならないように、高いワインを頼んで気分を上げちゃうのもいいかも。

今日の髪はハーファアップにして、毛先はくると大きめに巻いた。カメリアの花の形のベージュのバレッタは、花卉の先にきらきらがついていて上品で華やか。プッチ柄のラップワンピースに、底が真っ赤なパンプスを合わせ、気合を入れる。香水はワインの香りを損ねないように、かすかに感じる程度にした。大人びた色っぽさの中にかわいらしさを潜ませる。

カップルに負けないためにはパワーが必要だ。

確実にぼっちなのは私だし。

かといって自分の恋人を連れてくるわけにはいかない。だって透の奢りだから。

ベージュの刺繍が上品な、濃いグリーンのふかふかの椅子に腰を下ろす。壁に掛けられているのは高級そうな絵。この雰囲気だけでも気分はお嬢様だ。

優雅な気持ちで待っている間、シャンパン頼んでもいいかなあと考えていたら、目の前に影ができて顔を上げる。

「早かったな」

その言葉に私は思いつき顔をしかめた。

なんで、おまえがここにいる。今宮ー!

にここに、にここに。

透がコーディネートしたついでにテンネンちゃんにプレゼントしたんだろう。ポートネックの濃紺のワンピースは、彼女には珍しくタイトなライン。金色の飾りボタンは何気に某ブランドであることを示している。彼女自身では決して選ばない服。でも、こういう大人っぽいワンピースも彼女の清楚な雰囲気を引き立てている。

目元中心の薄化粧。でも明るいチークの入れ方はなかなかうまい。髪もアップにしていて、おくれ毛のかかる項と白い鎖骨のラインがわずかな色気も感じさせる。

やればできるじゃんね、と心の中で褒めてやる。もしかしたらどこかのプロが施したのかもしれないけれど。

襟のラインぎりぎりにある赤いのはキスマークかなあとか勘ぐって見ちゃうのは、普段と違う彼女の雰囲気のせいだろうか。

少しばかり興奮したような彼女を、いつも以上に甘い目線で見つめる透。四角いテールブルの向こう側で彼らが並んで座っているということは、私と今宮も並んで座っているということだ。

「牧野さん、いつも以上に素敵ですー。ほんとうに美人さんです！ 私ドキドキしちゃいます」

「あなたも馬子まこにも衣装で似合っているわよ」

「透さんが選んでくれたんですー」

私の嫌味、スルーしやがった。

「それに今宮さんもかっこいいです、素敵です。お二人並んでいると美男美女のお似合いのカップルみたいですね」

無邪気という名の邪気を感じるのには、私がひねくれているから!?

私は口元だけ笑みを浮かべて、目で透を睨にらんだ。

咲希ちゃんごめんね、と目で訴えているからには、これはおそらくテンネン娘の謀略ぼりつやくなのだろう。

今宮は「ありがとう」と言ったあと、ワインリストに視線を落とす。傍に立つソムリエに、今日の料理には合うのか、ピンテージが若すぎないか、など色々聞いている。

ジャケットにシャツにネクタイという仕事のとくと変わらない組み合わせなのに、

フォーマル感がよく出ているあたり、センスはいい。透はもともと板についているから違和感ないけど、この男も見た目通り、やっぱり場数を踏んでいるんだなと感心する。

私の彼氏なんか、こんなところ連れてきたってワインリストも読めないよ。テーブルマナーだって微妙だよ。

私とは言えば、一般庶民だけど、透と一緒にいたからこういう場にも馴れている。だって、透はおぼっちゃんだからねー。それを知ったのは、就職が決まってからだった。けれど、ああ、やっぱりという感じで驚きもなかった。ちなみにこのことは会社には知られていない。もし知られていたら、透の周囲はもつと騒がしかっただろう。

「牧野、このあたり選ぼうと思うがいいか？」

今日は透の奢さかりなので、ワインも好きなものを選ばせてもらっている。個人的にはポルドーが好きなんだけど、今夜は飲み慣れていないだろうテンネンちゃんもいるので、今宮が提案してきたブルゴーニュがちょうどいいだろう。

「というか――」

なんでこいつまでいるんだろうねえ。

テンネンちゃんはどうして呼んだんだろうねえ。

この子、私に彼氏いるって知っているよねえ？

色々ぐるぐる考えながら、ワインリストに目を通す。今宮とちょっと距離が近くてど

きつとするけど、平静を装って口を開く。

「ええ、いいわよ」

もう一万ぐらい高いやつにしようかと思っただけどやめた。

ウエイティングバーで会ったとき、「なんでここにいるの？」とつい今宮に言ってしまった。今宮は私ができることを知っていたんだろう、「透と夏井さんに誘われたからだ」とすんなり答えた。

でもたぶんそれは嘘だ。

透じゃなくて、誘ったのはこの夏井莉緒だから。

だって、私たちを見る目の中にお星さまがきらきら輝いている。

「今宮さんと牧野さんのツーショットって素敵です!! 写メ撮りたいぐらいです!!」

「莉緒、それはやめようね。咲希ちゃん、写真嫌いだからさ」

空気読めこの女、と怒鳴りたいのを抑えた私を褒めてほしい。

「夏井さん。私、恋人いるんだけど知らなかった？」

「知っていますよー。っていうか、牧野さんに恋人がいないわけないじゃないですか！でも私は、二人が仲良くしてくれたらなって思います。透さんにとって今宮さんも牧野さんも大事な人だから」

爆弾落としたよ、この子。

後半しつとりと言われて、何も考えていなさそうなのに、実は色々考えているんだと思っ、びっくりする。というより、私と今宮が仲良くないことわかっていたんだ、この子。でもだからって、そうだねとは言えない。

「私にとっても、透は大事だよ。でも、ごめん。夏井さんや今宮くんことはそれほどでもないから」

「咲希ちゃん……」

透が困ったように呟く。だって言わないとわかんないじゃん、この子。傷ついた顔してもダメ。

「わかっています。でも、牧野さんにどんなに嫌われても、私は牧野さんが好きです」
本当にツワモノだなあ、この子。だから嫌なのよ。この場合悪者になるのは、どうしたって私になるし。

「うん、それはあなたの自由だから否定はしない。でも今宮くんと仲良くしてほしいという願いは悪いけど叶えられないわ」

「オレは牧野と仲良くしたいけどね」

「そんな胡散臭い笑顔で言ってもダメ。今宮くん、私のこと嫌いって思ってるじゃない。そういうオーラばんばん感じる」

いつもならここまで応戦しないけれど、ここが個室だということと予想外の彼の出現

とにちよっと苛立っているから、許してほしい。

だって私、透とテンネンちゃんと三人で食事だって思ってたから色々考えて。

なのに狂わされちゃって。

ものすごく意地悪な嫌な女になっている。

透の前なのに。

「あの、私。ごめんなさい。そういうつもりじゃなかったんですけど」

「莉緒、大丈夫だよ。この二人のやりとりは、いつものことだから気にしなくていい」

「そうよ！ 今から美味しいもの食べるんだから、めそめそしない！」

個室の扉が開いて料理が運ばれてくる。それをきつかけに私は気持ちを入れ替えた。テンネンちゃんはすこーし、微妙だったけどね。

「結婚しようと思うんだ。色々心配かけたから、二人には一番に伝えたかった」

目の前には黄色いマカロンとトリュフ、クッキーが載ったお皿。私の手にはハーブテイー。

うん、こんなお店を指定された時点で、ただのブラウス貸したお返しじゃないことぐらい予想はしていたけどね。予想外だったのは今宮がいたことだけど、そんな報告なら

ば呼んだ理由がわからないでもない。

「おめでとう、透」

「よかったな、夏井さん」

私が透だけにお祝いを述べたのに気がついたのか、フォローのように今宮が付け加えた。どうせ、どきどきわくわく状態のテンネンちゃんには、私の嫌味なんかわかっていないだろう。

「ありがとうございます、朝陽」

「ありがとうございます」

大好きで大事で、ずっと傍にいた男友達。

私にとっての桜井透は言葉にするなら、そんな存在なのかもしれないけれど……それだけでは表せない感情が私の中に波のように湧き起こる。

初めて顔を合わせた高校の教室。

志望大学の見学説明会で一緒になって以来、毎日のように放課後勉強していた学校の図書館。

二人で見た合格発表。

大学の四年間を共に過ごして、サークルもゼミも同じだった。

初めてにも近い恋と苦い失恋。二人で泣いて苦しんだ夜。

泣きそうなのをごまかしたくて、ハーブティーを飲み干す。

「おめでとう」とは言えても、心からの笑顔まで付け加えることはできなかった。透とテンネンちゃんが一緒にいる時間が長くなればなるほど、私は心のどこかでいろんな覚悟をしてきたはずだった。これまでも透の傍に女がいなかったわけじゃない。けれど、テンネンちゃんと一緒にいる透は、私でさえ知らない顔を時折垣間見せていたから。いつか、こんな日が来るって。

そうして、長くも短くも感じるデザートタイムが終わる頃。

「莉緒……朝陽と一緒に先に出てくれる？」

柔らかな優しい声が聞こえて、レストランの個室に私は透とともに残された。

「泣かないでよ、咲希ちゃん」

「泣いてないわよ。おめでたいのに泣く必要ないし」

いつの間にか椅子から立ち上がった透が、座ったままの私をそっと抱き寄せた。泣いてなんかいないはずなのに、言葉にされたせいで、白くてハリのあるテーブルクロスが滲んでほやける。

「こらこら、彼女（いや、もう婚約者かな？）以外の女に触っちゃダメでしょう？」

「咲希ちゃんに泣かれると、僕はどうしていいかわからなくなる」

「放っておけばいいのよ。透はあの子だけを慰めればいいんだから」

ふんわりといつも同じ透の香りが鼻腔をつく。優しく包むような腕からは温もりが伝わってきた。私の世界にいつもいて、それを守ってくれた人。この腕を離さなきゃと思うのに、私は透の腕に手を伸ばしてしまふ。

「こんなことしていたらあの子、嫉妬するか不安がるよ。もう私とは会わないでとか言われるかも」

彼女なら当然気になる、恋人の女友達なんて。

それが理由で、透は昔、恋人との関係がぎくしゃくしたこともあった。結婚するなら、もうそういう関係は許されないだろう。

私にとって夏井莉緒は、私から透を奪う嫌な女。でも透にとっては一番大事な女。

「莉緒は言わないよ。僕が咲希ちゃんと二人でいても、あの子は何も言わない」
知っている。

あの子は一度も私たちの関係を疑わなかった。嫉妬さえしなかった。それが本心なのか疑って、私はわざと透の傍にいたこともあったけど、彼女は私たちの関係をありのまま認めた。その強さが憎らしくてうらやましくて。

だから透は彼女を選んだのだろう。

「結婚しても咲希ちゃんと僕の関係は変わらない。僕は君の友達で、一番の味方で居続

ける。それはずっと僕たちの間にある約束だ」

私たちは深く傷ついた。互いを傷つけあってしまった。

だからもう二度と透をそんな目に遭わせたくない。

「透……幸せになつてね」

「うん」

「私も、幸せになるからね」

「うん、咲希ちゃんは幸せになれるよ」

一瞬のためらいのちに、抱きしめる腕にぎゅうつと力が入った。私はとっさに立ち上がって同じように透を抱きしめる。あまり触れ合うことのなかった私たちは、これが最初で最後まで互いに互いに腕をまわす。

透、透、透。

恋人でもないのに私たちは抱き合う。それは血の繋がった者同士が交わり合う抱擁に似ているのどこか違って、この腕の強さを、胸の広さを、匂いを忘れないでおこうと思う。込みあげてくる涙を逃がして、私は吐息とともに言葉を吐き出した。

「透。私と夏井さん、どっちが大事？」

透は腕をゆるめると私の顔を覗きこむ。そして幸せそうな笑顔ではっきりと言った。

「莉緒が一番大事だ」

うん正解だよ、透。

すかさず答えを出すことができる相手を、あなたは見つけたんだね。

* * *

「おめでとう、透」

そう言った牧野の横顔は今までに見たこともないほど儂^{はか}げで、微笑んでいるのか泣きそうなのかよくわからない表情をしていた。

いつかは結婚をするんだらうと、最近の透たちを見ていて想像はついていた。だから、そのときは牧野もちょっとは悔しそうにするかもなと思っていた。

実家に帰るといふ夏井さんと、酔ってふわふわと危なそうな牧野をタクシーに乗せたあと、オレと透は二人でバーに入った。牧野は一人で大丈夫なんだらうかと心配したけれど、「一人で帰りたい」と頑^{かた}なに突っぱねられれば、何もできない。

グラスをゆらりと傾^{かたむ}ける透を横目で見ると、黒いカウンターが淡い光を反射して影を作る透の顔は、珍しく読めない表情を浮かべていた。結婚が決まっってはしゃぐでもなく、いつもの優しい穏やかさもなく、どこか覚悟を決めた落ち着^{しじ}きが滲^{にじ}んでいる。

グラスの中の氷がからりと音をたてて溶けた頃、透が切り出した。

「莉緒は……僕が守るよ。朝陽に誓ってやろう。だから朝陽には咲希ちゃんを守るチャンスをあげる」

「……なんだ、それ」

ふざけているのかと思えば、グラスをカウンターに置いた透は真剣な目でオレを見ていた。いつもは穏やかなくせに、こういうとき本性を現してくる。

優しげな仮面を脱いだ腹黒王子。

夏井さんを手に入れたから、牧野はもういらなくていいってことか？ そんなことをオレに言われてもどうしようもない。牧野は初対面のときからなぜかオレを嫌っているし、オレも彼女に特別な感情はない。だから思ったままに、そう言ってやる。

「ふーん。朝陽、気づいてないんだね。咲希ちゃんかわいいよ。スタイルもいいし仕事もできるし、気はちよつと強いけど面倒見がいい。ああ見えて意外に家庭的でさ、あまり他人には作らないけど料理も得意だし、たぶんお嫁さんにするにはああいう子が一番いい」

透の言葉にオレはわけがわからなくなる。おまえはさつき夏井さんと結婚宣言したばかりだ。そりゃあ牧野のことを特別に思っているのは知っているけれど、そこまで褒めるなら夏井さんじゃなくて牧野を選べばよかったんじゃないか？ 不快なものが腹の中からせりあがってくる。

それを抑えこむべく、オレはグラスの中身をぐいっと呷^あった。

始終にこやかだった夏井さんとは対照的に、牧野は気分がムラが激しかった。「オトモダチ」をどんなに強調していたって、牧野が透に特別な感情を抱いていたのは今夜の様子で立証された。たぶん。

そして、こいつもそれはわかっているはずだ。

「僕はね、朝陽。大事なものはずっと手元に置いておきたいタイプだ。どんな手段を使ってもね。そうして咲希ちゃんを縛ってきた。大学は偶然だったけど、同じサークルやゼミを選んで傍にいたし、就職先を一緒にしようと誘ったのも僕だ。結婚しても傍にいる。咲希ちゃんにはそう言い聞かせている」

「さっそく、浮気宣言か？」

「違う。愛しているのは莉緒だ。たとえ、莉緒と出会わなかったとしても僕は咲希ちゃんとは結婚しない。だから咲希ちゃんにどんなに好きだって言われても拒んできたし、これからもそうする。たとえば、僕は莉緒を失ってもまた別の誰かを愛するだろう。結婚もするかもしれない。でもね、咲希ちゃんを失ったら誰もその代わりにはなれない。僕は一生、咲希ちゃんを失いたくない。だから絶対に恋人や伴侶^{パートナー}の位置には置かない。ずっと傍にできる友達^{フレンド}の位置に置き続けるんだ」

淡々とそう言い続ける透に、オレははじめて恐怖を覚えた。腕にざわりとまとわりつ

く震え。こいつは、夏井さんの代わりはいても、牧野の代わりはしないと宣言しているのだ。

「……それで、オレになんでそんな話をする?」

「さすが朝陽だね。僕が見込んだ通りだ。こんな話を聞かされたら、普通はふざけるなとか最低だとか罵声ばせいを浴びせるだろうけど、君はそうはしない」

「残念ながらオレは、おまえと牧野の関係をずっと見てきたからな」

——大事な友達だから、遊び相手としては手を出さないでね。

社員研修で知り合ったときから、こいつは感情を読ませない口調で、牧野に興味を抱いた男たちに釘をさしていた。変な男が近づかないように、それも牧野本人には気づかれないように予防線を張る。「咲希ちゃん」と名前前で呼んで、自分にとって特別だと周りにアピールする。

牧野が透にすり寄っていると見ていた連中が多かったようだけれど、透と一緒にいることが多いオレからすれば、むしろ透の方が牧野に固執こしつしているように見えた。

そう、二人の関係は互いへの想いで成り立っていた。牧野は透を男として好きだし、透はそれを超えて牧野に執着しやくちやくしている。だからいざれ二人は、友達の一線を越えるのではないかと思っていた。

「おまえが牧野を好きだと言って言っても違和感はない。むしろ他の男のものに平気できることが不思議だったよ」
 そう、そこまでの想いを牧野に抱きながら、たぶんこの男はそういう意味では指一本彼女に触れていないはずだ。たとえ隠された欲望があったとしても。

透は髪に指を通すと、そのまま肘ひじをついた。珍しくだらしない仕草で自嘲じちようするように口を歪ゆがめる。結婚すると伝えた席で、透が牧野と二人きりにしてほしいと頼んできたときから、こいつからは幸せなオーラとは違うものが漂たなよっていた。

「平気じゃなかったよ。でも、それは咲希ちゃんも同じだ。僕たちは互いに想い合いながらも傷つけ合っている。それでも僕は彼女を手放せなかったし、彼女も逃げなかった。もし咲希ちゃんが抱いてなんて言ってきたら、キスもセックスもするけど恋人にはしない最悪な関係になっていただろうね。咲希ちゃんの気持ちに絶対に受け入れないこと。カラダには触れないこと。それが僕が自分に課かした枷かせだ」

言わなかった牧野がえらかったのか、言わせなかった透がすごかったのか。
 この二人の関係も、牧野にこれだけの感情を抱きながら夏井さんを選んだ透の気持ちもオレにはよくわからない。

ただ、夏井さんはそれをどこかでわかっているのかもしれないと思った。彼女はこの話を聞いても傷ついたりはしないだろう。おそらく、だったら私は長生きしてずっと透さんと一緒にいますよ、ぐらいは言いそうだ。だから透は彼女を選んだ。

「僕はね、朝陽が咲希ちゃんを守ってくれたらって、そう思っている。ずっと咲希ちゃんにふさわしい相手を探してきた。一番ふさわしいのは君だ。だから僕は君が咲希ちゃんに近づくことも、菫緒に近づくことも許した。君なら咲希ちゃんを任せられる」

「……………」

すぐには言葉が出てこない。こいつは牧野の相手まで探していたのか？ 自分が夏井さんを選んだとき、一人になる牧野のことを考えて？

「嫌いじゃないでしょう？ 咲希ちゃんのこと」

「……嫌うほどの感情はないが。というか、牧野の方がオレを嫌っているだろう？ そりゃあ、無理だ」

そう、牧野がオレを嫌っているのは自分でもわかる。あいつも隠していないし。

「咲希ちゃんが嫌いなのは朝陽じゃなくて、朝陽に付随する面倒くささだよ。自分を嫌っている相手を自分のものにするぐらい、君なら簡単にやれるはずだろう？ 咲希ちゃんはある見えてものすごく初心だし、男慣れしてないからね。落としがいあるよ」

おまえ、本当に牧野のこと大事に思っているのか？ なんだかよくわからなくなってきた。

「まあ、いいや。どうしても気が乗らないなら無理強いはいしない。咲希ちゃんのことを心から大事にしてもらえないと意味ないし、君が無理なら別の男を選ぶしね。咲希ちゃ

んは強引にいけば、たぶん情にほだされるタイプだから難しくはない」

「だったら、なんでオレに関係ないことまでべらべら話すんだ」

透は言いたいことを言って開き直りでもしたのか、わずかに残っていたグラスの中身を飲み干す。空になったそれがさらりと光を反射した。

「君だったら、僕と咲希ちゃんのこともわかっているし、菫緒のことも知っているし、差し障りないかなと思っただけだよ。僕がどれだけ咲希ちゃんを大事にしているかわかっているなら、一生僕の傍に縛りつけるのに協力を仰げるかなと思っただけだ。関心ないなら今後一切、咲希ちゃんには近づかないでね」

言いたかったのは結局そこかよ、と少しだけ浮上した様子の子の透にオレは肩をすくめた。オレにチャンスをやると言いながら、関心がないなら近づくな、そんな矛盾をこいつは要求する。

牧野咲希。

透が大事にしている女。どんな手段を用いても一生縛りつけたい女。

それほどの魅力があいつのどこにあるのか。

だいたい、牧野には付き合っている彼氏がいるじゃないか、と思いついたのは、透と別れたあとだった。

* * *

「私と牧野さん、どっちが大事なの!？」

昔、そう聞かれた透は「どっちかなんて選べない」と答えた。女友達と恋人では比べる次元が違うから、というのが彼の言い分だった。まあ、恋人からしてみれば、おもしろくないどころか不愉快な答えだ。

ちなみに私も昔の彼氏に聞かれたことがあって、やっぱり答えられなかったから、それ以降、恋人ができて透の存在は極力隠すようにした。

だって透は王子だよ。

顔はいいしスタイルもいいし頭もいいし、ついでに人当たりもいい。たぶん透みたいなのはタイプじゃないっていう女だって、透に優しくされたり特別扱いされたりしたら、ころっとなるだろう。

そんないい男と友達なのだから、彼氏が妬か^やないわけがない。妬くだけならまだしも、疑われて行動を制限されたりしたら面倒だ。

なので、今私がお付き合っている彼も透の存在は知らない。

合コンで知り合った彼は、体格がよくてクマさんみたいで、イケメンとはいえないけ

ど憎めない感じの人だった。

好きになったのは彼の方が先で、彼は、綺麗でかわいい牧野さんがオレを相手にしてくれるわけがない、とか遠慮がちではあったけれど交際を申し込んできた。

イケメンには懲^こりていたので、私が男を選ぶ基準に顔はない。だってイイ男にはもれなく面倒な女がつきものだし、自分に自信があると態度がでかくて性根が腐っているのも多いし、要求も多そうだから嫌なのだ。

それに、透というハイスベックな男が傍にいたので、どうしても似たタイプは比較してしまふ。

そう、比べてしまふ。

誰と付き合っても、一緒にいても、無意識にでも。

それでも私だって幸せになりたかった。

「咲希ちゃんは幸せになれるよ」——透がそう言う通りに。

なのに、なんでこうなった!!

「地味な人なんだ。咲希みたいに綺麗じゃないし、おしゃれでもない。要領も悪くて失敗ばかりだけど、一生懸命頑張る人なんだ。オレには咲希がいるからって思った。かわいくてスタイルもよくて、オレにはもったいないくらいに彼女が。そう思ったけど……。きつと咲希にはオレよりもっといい男が現れると思う。でも彼女は、オレじゃないとだ

めなんだ」

金曜日の夜のレストランで食事をしているとき、彼は同じ職場の人に告白されたと言ってきた。彼女のことは聞いたことがある。すぐく家庭的な子なんだけどね、ちよつと控えめすぎてもつたいないんだよね——そんなふうには彼が零していた。私がテンネンちゃんのことでつい愚痴つてしまったときだろうか。

男ってどうしてそういうタイプに惹かれるんだろう？ いい子だと思うよ。自分の美貌や出来を鼻にかけて人を見下すような女たちに比べれば。

咲希ちゃんかわいいね。いつも爪の先まで綺麗にしているね。スタイルもいいしモテるんだろうな。

——そう言われるように、私は好きな男に一番いい自分を見せたくて努力している。なのに、どうして自分は大めだと思ひ込んで、おしゃれさえしようとしないう女に負けなれないいけないんだろう。

透は、垢抜けないテンネンちゃんの素朴さや素直さに惹かれた。

彼は、地味で頼りないけど一生懸命な女性に惹かれた。

男は——

かわいくて綺麗でスタイルもよくておしゃれで、微妙に家庭的で明るくて社交性のある誰からも好かれる女が、好きなんじゃないの!?

透をテンネンちゃんに奪われ、恋人を地味な女性に奪われる。

私は何が足りないんだろうか。これ以上何を努力すれば、私は幸せを手に入れられるの？

流行をチェックしてその中でも自分に似合うものを選ぶ。髪も肌も爪も手入れして、時間とお金を費やした。仕事だって手抜きせず一生懸命やってきた。しっかりしすぎるのもかわいくないから、たまには弱いところも演出して、甘える振りをして男を喜ばせることだってできる。

でも私の大事なものを奪っていくのは、いつも私とは真逆の女ばかり。

翌週、さすがに落ち込んだ私はコンタクトをはめる気力も着飾る元気もなく、自分のスタンスを捨てて会社に向かった。

腫れぼったい目は黒いふちの眼鏡で覆い、髪は巻きもせずひとつにまとめて黒いゴムで結んだだけ。化粧もファンデと眉毛と口紅だけ。スーツだけはラインが綺麗なものを選んだだけ。

周囲はいつもと違いすぎる私の格好にビビっていたけれど、仕事だけは普段通りにこなしていたので誰も事情を聞いてきたりしなかった。

愚痴りたい。

愚痴りたい。